

黒服とシルバーカー

うわあ、これが本物の黒服（驚）！

今思えば随分と失礼な感想だが、その光景を見たときの正直な第一印象がそれである。

訪問看護師として、下町を自転車で駆け抜け始めて数日。初めて踏み込んだ訪問エリアはラブホテルとソープラントが立ち並ぶ地区。

ソープラントの入り口に、客引きの人たちが立っている。いわゆる、黒服のお兄さんとか呼ばれてる方々だ。ロココ調とかバロックみたいなお城チックの建物の並びに沿って、ずらりと黒服のお兄さんが立ち並んでいる。それも道路の両脇に。

その光景に、冒頭の感想が思わず浮かんだのだ。

しかし、その黒服のお兄さんが立ち並ぶ前を、自転車をこいで通り抜けるのが何とも面白いというか、落ち着かないというか。

いいんですか、私ここを通り抜けて。

そこは、そんな気持ちにさせる雰囲気まんまんのソープランド通りだった。

ある日のこと。黒服さんたちのいるエリアに差しかかると、車が私の前に入ってきた。ずいぶんゆっくりと運転するんだなと思ってこちらにも自転車のスピードを落としていると、いつもはあまり動かない黒服さんたちが急に動き始める。

いわゆる、客引きである。自分たちの店に入ってもらうように誘っているのだ。愛想よく誘っているが、けっこう真剣である。

その通りの入り口にいた黒服さんが、私の目前にいた車の持ち主をどうやら獲得したらしい。

そんな姿を見ると思わず、世の中の人みんな頑張っているんだなあ、私も頑張らなきゃという気持ちになってみたりする。ついでに自転車をこぐ足にも力がかもる。

けれども、そんな見当違いな気持ちをよそに、黒服のお兄さんたちは、私を気にする様子はない。むしろあまり視界に入っていない気さえする。

訪問看護中は最低限の身だしなみがきちんとしていればそれでよしで、あとは自転車をこぐから機能的重視で防塵防風用の眼鏡をかけマスクをしている私もかなり怪しい風体で

ある。顔見知りの人に声をかけたら、すごくいぶかしげな顔をされた風体である。どこのオバサン？ そんな感じ。冬になれば更に着膨れして、ますます怪しい。

そんな私でも、彼らにとっては風景の一部みたいなものなのだろう。例えば今、目の前にある電信柱みたいなもの。だから、たまに目が合っても、別段表情をかえることもない。当たり前だ。いちいち気にしてたら仕事にならない。彼らにとって私も風景なら、彼らもまたソープランドを背景にした風景の一部のように当たり前前に存在している。

そうして彼らと私の間には何の交流もなく、淡々とお互い単なる風景として過ぎていったのだった。

それがある日、急にその風景が色彩を帯び、生きたものとして動き出す時がある。

そのこの地区へと訪問する理由は、七十八歳になる女性患者さんのためだった。

高血圧と不整脈に、脳血管性認知症をあわせ持つSさんは、そのソープランド通りの終わりの方から少し裏に入る、込み入った路地裏に住んでいる。今時では珍しい土間がある家である。4人家族なのだが、日中は家に誰もいなくなりSさん一人で過ごすことも多い。

このSさん、なかなかアクティブな人なのである。昼間、何かを思い立つと土間の片隅に置いてあるシルバーカーを引っ張り出して、サンダルをつっかけて出かけるのである。いわゆる徘徊というやつだ。

子供の頃からこの下町で商売をしている家に育ち、くるくるとよく働く人だったSさんは、家が商売をやめた今でも、認知症のため、突如としてお客さんが来るから準備しなければと思いたち、シルバーカーを押して出かけるのである。

しかし、近所の商店街へ行っても何の用事で来たのかわからなくなってしまう。そのため商店街をぐるぐると歩き回って、時には遠くまで行って迷ってしまったり、家の近くまで戻って来ても家までたどり着けなかったりする。

そうとはいえ、私たち訪問看護師も、家族も、基本的には「徘徊するのは元気な証拠」という考え方なので歩き回ってもらうのは別段かまわない。家に閉じ込めておくのは逆効果にもなる。恐いのは、転倒や交通事故である。やや膝関節が変形気味のSさんは傍目から見ても歩き方が危うい。杖ではすごく心配である。

そこで家族がシルバーカーを購入してくれたのだ。一見、シヨッピングカーのような形

をしているこの物体は、高齢者や足腰の弱い人の歩行補助のための押し車で、物を収納するフタがベンチのようになっていて座ることができ、外出の際に体を支えたり休憩したりするのに便利なつくりである。

このシルバーカーを押して、ちよつとヨタヨタしながらSさんはひたすら歩く。そして私は、時間に余裕がある時は見守りをかねてその後をそおつついていくのである。留守の時は、商店街まで探しに行くこともある。

そんなある日。

またSさんの家を訪問しようと、例の黒服さんたちが立ち並ぶソープランド通りを自転車で駆け抜けていた私は、ふと気を許した瞬間に、自転車ごとひっくり返ってしまった。

その日は、自転車のカゴに訪問看護用のグッズ（血圧計や体温計、聴診器、テープやハサミなどの訪問看護七つ道具の他に届ける薬、書類等々）以外にも、荷物を詰め込んでいたうえに、風が強い日でいろいろと防風用に着込んでいたので、自転車に乗るバランスが保てなかったのだ。

ちよつと何か考えごとをしていたのか、すこし上の空になったところで急に天地がひっ

くり返って、青空が視界に入ってきてようやく自分が転倒したことに気がついた。

恐らく事態が飲み込めずに、しばらく地面に寝ころんでいたのだろう。

バタバタと耳元で複数の足音がした。

なんだ？　と思っていると、蝶ネクタイが目飛び込んでくる。

蝶ネクタイ。

それをつけている人はあの黒服さんたち以外にない。

おおと思っていると、口々に「大丈夫ですか」と声をかけられる。

そして手が伸びてきて、私を助け起こしてくれた。

かなり間抜けな格好で、慌ててお礼を言う私に、黒服さんたちは微笑みながら、倒れた自転車を起こし、散らばった荷物をひろってくれた。

その中でも、少し年長とみえる黒服さんが私の荷物をひろいながら、「看護師さんなんですか？」と聞いてくる。手にはカバンからはみ出した血圧計が見える。

うなずくと、「やっぱり」とその黒服さんは言う。

え？　と私が軽く驚いていると、その方は笑いながらこう言ったのである。

「いや、あそこのおばあちゃんがさ、いつも歩いていくでしょ。シヨツピングカーみたいなのを押して。ヨタヨタしておぼつかないなあって見てたら、そのうちあなたが後をついていくから何でなんだろうって思ってたんですよ。家族じゃなさそうだし。やっぱり看護師さんだったんですね」

Sさんのことだ。ついでに見られてたんだ、後をそおっについていったところ。

「あのおばあちゃん、時々僕らに声かけていってくれるんです。雨の日とかに『ご苦労さんだね』とかって。自分はカサをさすの忘れてるんですよ。だから何だか心配で」
そう言ってその黒服さんは笑った。

その後、どう言ってその場を辞してきたのかはよく覚えていない。

恥ずかしさと意外さで胸が一杯になったせいか、ひたすらお礼を言いまくって自転車で飛び乗った気がする。

それまで、彼らは風景だった。その後ろに立つお城チツクのソープラントも込みで、このエリア独特の風景。住宅地には見られない、ちよっとかわった風景かもしれないけれど、この風景が日常。この風景の奥にSさんやさまざまな人々が生活する家々がひっそりと存

在する。

立ち並ぶ黒服の彼らと、その前をシルバーカーを押して歩くSさん。そしてそこを自転車で駆け抜ける私。

今までお互いに風景だった私たちが、生きたものとして触れ合う瞬間があるのだ。その風景が、精彩を帯びて動きだす瞬間。

彼らは今でも、あの通りに立っているのだろう。

いつものようにあまり表情を浮かべず、淡々と。客がやってくるのを待っている。

私はもうあの通りを自転車で駆け抜けないけれど、それでもあの瞬間を思い出しては、人の縁というものを思っ、ほんの少しだけ胸が熱くなる。

あの日。

私が転んで助け起こしてもらった日も、Sさんはシルバーカーを押して出かけていった。Sさん、いいところに住んでるね。そんなふうにSさんに言ったら、Sさんは笑った。